

現代日本文学 150 年における香港イメージの深化

藤井 省三

(一) 虚構の中で誕生期香港を見た日本人

香港作家の董啓章（トン・タイチョン、北京語トン・チーチャン、とうけいしょう、1967-）の『地図集』（1997年）は、香港地図を虚構として読み直す学術的な小説である。その一節「蜃気楼〔ミラージュ〕 mirage-towers in the air」は、日本の江戸時代末期に作成された『尾洲喜野漂流記』を引用しており、1845年3月（日本天保12年）に、漂流民の船乗りの喜野〔きの〕が見たというヴィクトリア市誕生期の光景を、次のように描いている。

マカオの東に未開の島あり、英国人はこれを占拠し、香港と名付けたり。香港は周囲二十里余り、禿げ山は高さ一八〇〇から一九〇〇メートル（十七～十八町）、港は北に向かいて開き、入口狭し。〔中略〕港湾南岸まで近づけば、霧は次第に晴れて、汽笛ポーポーと鳴り響き、波は突如激浪に変じ、船艦は目覚めしばかりの海獣の如く、忙しく飛ぶが如くに往来せり。岸にて湧き立つ水煙の中より高樓が迫り上がり、臨海する邸宅は数千、唐様洋風の屋敷が軒を連ね、ゆるゆると波濤を開いて上に延び、峻険急坂なる山の斜面を這い上がりゆく。更に近づけば、岸辺の海水はたちまち引き、整然たる街路が現れ、商人漁師が行き交うこと絶え間なく、各地で山を開き岩を砕き、大いに土木を興し、石工に瓦師、左官に大工、苦力〔クーリー〕の数は千を以て数え、その間に労役し、入り乱れて湧き立つ様は、蟻の巣作りのごとし。岸に泊まりこの海中より生まれ出でたる土地に足を踏み入れれば、なんと大洋漂流の感あり。その広大さ、果てしなき様は、海上に迷いし者の夢中の景色のごとし。*¹

董啓章が描く「海上にて迷いし者の夢見し景色」とは、現代日本人が見続けてきた香港風景の原点といえよう。現代香港作家は、イギリス植民地誕生期の香港を訪れた日本人船頭の目に、標高550mのヴィクトリア・ピークが三倍もの高さに見えた、という虚構を設定することにより、近世末期の日本人に対する近代香港の衝撃の大きさを描こうとしたのであろうか。確かに香港は幕末明治維新から現在に至るまで、常に新たな想像力を日本人に喚起してきたのである。本稿はこの150年間に日本の文学者、映画人等が描いてきた香港イメージを概観し、日本文化における香港のあり方を考察するものである。

ちなみに1840年代に尾洲すなわち現在の愛知県の船員が見た『日本庶民生活史料集成第五巻 漂流』（池田皓編、東京・三一書房、1968年）には、「尾州大野村船船漂流一件（筆者不詳）」というそれらしき題名の漂流記が収録されており、同書収録の別の漂流記

である「東航紀聞」には、董啓章が描く「喜野」の漂流体験に類似したものが記録されている。

(二) 幕末明治大正の香港寄港者

イギリスから中国に対する香港の主権の返還期、すなわち「香港の中国回帰」の1997年前後には、日本でも多くの香港関係書が刊行された。その内の一冊である『香港——アジアのネットワーク都市』は、新書版の教養書であるが、東西のみならず東アジア、東南アジアをも結ぶ都市、そして中国大陆と太平洋を経済圏とする中継都市として、アジア史の視点から香港を縦横に論じた名著である。同書第二章「香港と日本」で、著者の浜下武志・東大教授（所属職名は当時のもの。以下同）は「明治以降、日本は香港との関わりにおいて、いわゆる近代日本が直面したほとんどすべての問題を経験してきた」と指摘している。^{*2}

明治・大正期（1868～1926年）に香港に滞在した日本人は、主に外交官と商社員であるが、ヨーロッパ航路に乗船した文化人にとって、最初の寄港地が上海・香港であり、植民地都市の香港を印象深く記録している。香港の日本文化研究者である陳湛頤が作成した中国語訳資料集『日本人與香港——一九世紀見聞録』は、「第一篇 日本的漂流船員與香港」「第二篇 幕末與明治初年日本訪美、訪歐使節団經港時的見聞」「第三篇 十九世紀後期日本各界人士的訪港見聞」から構成されており、これにより幕末から明治期までの日本人の香港イメージの概観を知ることができる。たとえば第二篇には思想家・教育家にして慶應義塾大学の創設者としても著名な福沢諭吉（1834～1901）の香港寄港の日記『西航記』が収録されている。福沢は1861年に江戸幕府の遣欧使節団に通訳として参加し、62年1月に香港に寄港したのだが、その一五年後の1882年に香港での体験を回想して「圧制も亦愉快なる哉」というエッセーを書いている。

先年記者が英船に乗て香港に碇泊中、支那の小商人が靴を賣らんとて本船に來り、頻りに乗組の人に勸るゆゑ、記者も一足買はんものと思ふて値段を押合ひ、船中無聊の餘り態（わざ）と手間取りて談判の折柄、傍に居合せたる英人が此様子を見て情を知らず、又例の支那人の狡猾とでも思ひしことにや、手早く其靴を奪取て記者に渡し、二弗ばかりの金を出させて之を支那人に投與し、物をも言はず杖を以て之を船より逐出しければ、支那人は價の當否を論ずることも叶はず、一言もなくして恐縮するのみなりき。記者は固より他國人のことなれば、當時この始末を傍觀して、深く支那人を憐むに非ず、亦英人を惡むにも非ず、唯慨然として英國人民の壓制を羨むの外なし。彼の輩が東洋諸國に横行するは無人の里に在るが如し。在昔我日本國中に幕吏の横行したるものよりも一層の威權にして、心中定めて愉快なることならん。我帝國日本にも幾億萬圓の貿易を行ふて幾百千艘の軍艦を備へ、日章の旌旗（せいき）を支那印度の海面に翻へして、遠くは西洋の諸港にも出入し、大に國威を耀かすの勢を得たらんには、支那人などを御すること彼の英人の舉動に等しき

のみならず、現に其英人をも奴隸の如くに壓制して其手足を束縛せんものをと、血氣の獸心自から禁ずること能はざりき。*³

香港の靴の行商人に横暴に振る舞うイギリス人を見て、日本が経済的軍事的に躍進し、イギリス人をも奴隸のように圧制したいと思った、という福澤の「血氣の獸心」は、典型的な帝国主義者の発想といえよう。これに対し陳湛頤は次のように指摘している。

對於當時亞洲各國受壓迫和勞役的民眾，--「心中既不深憫中國人」，福澤並不特別表示同情；而「我等的志願，是要對這種壓制施以壓制，最後獨自壓制世界」，雖謂激憤之言，但徵諸福澤日後提出「脫亞論」，支持武力干涉朝鮮和對中國採取強硬政策，種種具有侵略主義色彩的言論，在此文不也露出了端倪嗎？**⁴

福沢諭吉の「脱亜入欧」とは逆に、アジアとの共生を願って孫文の革命同志となったのが宮崎滔天（1870～1922）である。彼は日清戦争直後の1895年10月に神戸からバンコックに渡っており、その際に香港から乗船した船では数百人の貧しい中国人労働者と同行了た。彼らいわゆる「苦力〔クーリー〕」に対する宮崎の「熱愛」は、福沢諭吉とは正反対のものであった。*⁵

神戸を発して航行五昼夜にして香港に達し、更に船を更（あらた）めて暹羅に向ふや、幾百の支那労働者は余等一行と同船せり。是れ人の目して禽獸と同視する所謂苦力（クーリー）なるものの一類なり。余が一行の百姓と雖も之れに近づくを欲せざる一種の汚穢物なり。然れども余は実に彼等を熱愛するを禁じ得ざりき。余が一生を托すべき支那国民なりと思へばなり。余が大に用ゐて以て人道恢復の用をなさしむべき民と思へばなり。然り、我に敵意なければ人皆我の味方ならずや。彼等何ぞ余に親むことの速かなる。〔中略〕〔苦力の一人がカタコトの英語で日清戦争後の両国和解を強調して最後に〕Yes all finish,now finish! と。彼は平和条約の終結を説いて、暗に交情の復旧を勧説しつゝあるなり。是れ実に禽獸と同一視せらるゝ苦力の言なり。余は彼等の為に慰められて、航行八日の苦を忘れて暹羅に入れり。

『日本人與香港』は「第三篇 十九世紀後期日本各界人士的訪港見聞」で森鷗外（1862～1922）の『航西日記』を収録している。鷗外は陸軍軍医として1884年にドイツ留学の旅に出ており、同年8月に香港に寄港し四日間滞在したが、この間の日記はもっぱらイギリス軍病院の視察記事で埋まっている。

それから一六年後の1900年、夏目漱石もイギリス留学の途上、9月の香港に寄港し、19、20日の二日間滞在した。『日本人與香港』は19世紀最後の年の漱石寄港については言及していないのだが、やはり日本の国民作家である漱石が抱いた香港の印象は、一読の

価値があろう。*⁶ 漱石日記における香港滞在の記録は、以下の通りである。

午後四時頃香港着、九龍ト云フ処ニ横着ニナル。是ヨリ香港迄ハ絶エズ小蒸気アリテ往復ス。馬関門司ノ如シ。山巔ニ層楼ノ聳^{そび}ユル様、海岸ニ傑閣ノ竝ブ様、非常ナル景気ナリ〔中略〕Queen's Road ヲ見テ帰船ス。船ヨリ香港ヲ望メバ、万灯水ヲ照シ空ニ映ズル様、綺羅星ノ如クト云ハンヨリ、満山ニ宝石ヲ鏤メタルガ如シ。diamond 及ビ ruby ノ頸飾リヲ、満山満港満辺ナクナシタルガ如シ。時ニ午後九時。

午前再び香港ニ至リ Peak ニ登ル。綱條鉄道ニテ六十度位ノ勾配ノ急坂ヲ引キ上ル。驚ク許ナリ。頂上ヨリ見渡セバ非常ナ好景ナリ。再び車ニテ帰ル。心地悪キ位急ナ処ヲ車ニテ下ル。帰船。午後四時出帆。〔藤井注：一部、句読点を補った。〕

漱石来港時の香港の人口は約 28 万、漱石の出身地である東京の人口 195 万人と比べれば七分の一にすぎないが、彼の目にはイギリス植民地統治下で繁栄を謳歌する香港は美しく映っていたようすである。この香港とは対照的に当時の北方中国が義和団事件（1900）と八カ国連合軍の侵攻により苦境に陥っていることに、漱石は深い同情を寄せてもいた。彼はロンドン到着後の 1901 年 3 月 15 日の日記には次のように記しているのである。

日本人ヲ観テ支那人ト云ハレルト厭ガルノハ如何、支那人ハ日本人ヨリモ遙カニ名誉アル国民ナリ、只不幸ニシテ目下不振ノ有様ニ沈淪セルナリ、心アル人ハ日本人ト呼バルヽヨリモ支那人ト云ハルヽヲ名誉トスベキナリ

アヘン戦争から日清戦争まで欧米そして日本との戦争に破れ続け、ついには義和団事件で八カ国連合軍に北京を占領されるに至った中国——イギリス人の中にはこの国を見下すいっぽう、近代化＝欧化に邁進し 1902 年には日英同盟を結ぶに至る日本人に向かっては、「支那人ハ嫌ダガ日本人ハ好ダ」とお世辞を言う者もいたのだろう。これをうれしがるロンドンの日本人に対し、漱石は「世話ニナツタ隣ノ悪口ヲ面白イト思ツテ自分方ガ景気ガヨイト云フ御世辞ヲ有難ガル輕薄ナ根性ナリ」*⁷ と苦言を呈しているのだ。

漱石はロンドン到着後の 1901 年 4 月に、肺結核で病床に伏せていた親友の正岡子規のため、「倫敦消息」という留学暮らしのレポートを三通書いている。その中で漱石は「吾輩は例の通り「スタンダード」新聞を読む……吾輩は先第一に支那事件の処を読むのだ」「支那は天子蒙塵の辱を受けつゝある」と繰り返し「支那事件」に言及していた*⁸。留学先のロンドンやイギリス、さらには母国の日本に関する記事を差し置いて、義和団事件後の中国報道に真っ先に目を通していったという漱石の言葉からも、彼の同時代中国の行方に対する深い気遣いがうかがわれよう。

(三) 金子光晴 1929 年の香港体験と太平洋戦争期の日本軍による占領

前節で紹介した福沢諭吉、夏目漱石らの香港体験は、国費派遣の外交官や留学教授という身分によるヨーロッパ旅行に際する短い寄港であった。これに対し詩人金子光晴（かねこ・みつはる、1895～1975）の香港滞在は三か月ほども続いており、しかも「うすぎたない旅館」で、旅費稼ぎのための風景画作成のために空腹に苦しみながら写生をして歩き回る貧乏生活である。

金子光晴は愛知県海東郡越治村（現、津島市）の大鹿家の三男として生まれるが、父の事業の失敗により二歳で建築業・清水組支店長、金子荘太郎・須美夫妻の養子となる。父の本店転勤にともない 1906 年東京・銀座に転居し、浮世絵師・小林清親に日本画を習った。暁星中学を経て 1912 年から 16 年にかけて早稲田大学高等予科、東京美術学校日本画科、慶應義塾大学文学部予科に入学するがいずれも退学、19 年第一詩集『赤土の家』を刊行して渡欧、23 年『こがね蟲』で象徴派詩人として著名になり翌年森三千代と結婚した。25 年初めて上海を訪れ谷崎潤一郎の紹介で内山完造と知り合い、28 年 3 月上海再訪時に内山とともに郁達夫に招宴されて魯迅と面識を得ている。1928 年 9 月、妻の森美千代と土方定一との不倫に悩んだ金子は、ヨーロッパを見せてやると称して森を上海に連れ出し、七カ年に及ぶ東南アジア・ヨーロッパ放浪の旅に出たのだ。『どくろ杯』はその四〇年後の 1969 年に書かれた上海・香港・南洋における放浪の回想記である。

『どくろ杯』によれば、金子光晴は 1928 年暮れに美千代同伴で上海に四か月滞在して絵を書き溜めて個展を開き、ひとまず香港行きの旅費を稼いだ。その間、内山書店でしばしば顔を合わせた魯迅は「いつも、くすぐったい微笑で、僕をみながら、『この風来坊が』といった顔つき」*⁹を見せて、金子の浮世絵を二点買い上げてもある。上海暮らしの後に、妻と友人の佐藤英磨と共に香港に辿り着いた金子光晴は、香港でも絵を描いてシンガポール行きの旅費稼ぎをするのだが、上海と比べつつ香港の印象を次のように回想している。

短艇で、エスプラネードに着く。芝生のみどりがあかるい。軒廊のあるしずかな通りを、船からあがったばかりの三人は、幾日ぶりの定着感に足をたのしませながら、上海の煤でよごれた街とはうって変った洗いあげたような卵黄色の、イギリス風なきれいな街をみてあるいた。燈籠や、絹のうちわをうっている土産物の店もあり、表からみえる生簀に、ふと股（もも）ぐらゐの大きな鰻が、いっぱいになってとぐろを巻いている広東料理の店もあるが、あるいてゆく石畳のうえに、浮浪人たちがごろごろと寝ていて、足のふみ場をさがしながらあるかねばならない。料亭のような間口のひろい日本旅館があったが、手持ちの金の心細さをおもうと、休息することもためられた。街を左に出外れたところに、海をすぐ目の前の広場に沿うて建ったうすぎたない旅館を見つけて、ともかくもそこに一泊することにした。島には、真水というものが乏しく、わずかしか出ないふかい井戸に、朝晩、石油の空罐をさげた市民たちが、その水を汲みにきて列をつくっている。従って、水

の値段が高価で、鐘一杯の清水が十銭、二階まではこぼせると二十銭、三階なら三十銭となり、山頂まで、何十百層の高所でくらすものたちは、一杯の水におびたしい銭を払わねばならない。それに準じて一切の生活が高価で、おなじ支那でも上海とは違って、ひどくくらしにくい土地であることが、旅館の人のことばでわかった。旅館は部屋数も少く、二階が家人の部屋、三階が客室になっている。^{*10}

上海の人口は 1930 年には 314 万（そのうち欧米人約 3 万、日本人約 2 万）、かたや香港の人口は 1931 年に 85 万、上海の三分の一以下であった。すでに経済的にも文化的にも世界都市化していた上海と比べて、当時の香港は華南の珠江流域を商圈とするローカル都市であり、その駐留イギリス軍には上海防衛の任務が与えられていたのである。中央で活躍する大きな兄を、南の辺境からそっと見上げる小さな弟、というのが 1930 年代までの香港のイメージと思ってさしつかえあるまい。

このような二都関係にあって、金子光晴が香港を上海よりも洗練された都市であり、物価高で住み難いという印象を受けたのは興味深い。彼は香港の安宿から見える景色を「淡みどりに透いた海水は、ときにはオパールのように、時には、土耳其玉のようにみえ、半びらきの帆船がゆききするむこうに、アルミニウムをくすぼらせたようなイギリスの軍艦が腰を据え、ときどき、威嚇するように空砲を鳴らせた。」^{*11}と記している。さらに「この土地は亜熱帯、とりわけ檳榔子や、赤い襟巻をした猩々椰子が多く、根株が無数の静脈のようにからんだ榕樹の大木とともに、この街の風景のトーンを作っている。」とも回想している。彼は上海を「白晝！／黄い揚子江の濁流の天を押すのをきけ。」（鱸沈む——黄浦江に寄す）」と歌ったが、香港の南国海港都市の風景は、金子に上海とは異なる新鮮な印象を与えたのであろうか。

1937 年に 7 月、北京郊外で廬溝橋事件が勃発、日本は中国に対する全面侵略を開始した。中華民国は緒戦の奮戦もむなしく 11 月に上海、12 月に南京、そして翌年 10 月までに武漢、広州など沿海部から内陸部にかけての主要都市を日本軍に占領された。アメリカ・イギリス・フランスが主権を持つ租界都市上海は周囲の広大な日本軍占領地に浮かぶ孤島と化す。この上海に代わって香港が中国最大の流通窓口となり、中国貿易高の 50 パーセントを占めるにいたった。戦争景気に湧く香港には、本土からの難民 100 万が押し寄せ、人口は一挙に倍増して 200 万を越えている。上海の商工業や富裕層も大量に香港への移動を開始した。かくして 40 年代を迎えたとき、香港は兄貴分の上海と肩を並べるほどの大きな弟へと成長していたのである。

しかしこの香港の繁栄もわずか数年で中断される。1938 年 10 月、日本軍が広東を占領して香港ルートを断ち切ったのだ。続けて 41 年 12 月 8 日、太平洋戦争が勃発、日本軍は開戦と同時にイギリス植民地の香港に猛攻を加え、二週間余りでイギリス軍を降伏させるのであった。

日英香港戦争を従軍学生として体験し、その後、日本占領下の上海文壇に彗星のごとく

デビューした女性作家に張愛玲（チャン・アイリン、ちょうあいいい、1920～95）がいる。彼女は1939年、ロンドン大学が上海で行う入試に合格したものの日中戦争や第二次世界大戦のためイギリス留学を断念して香港大学に入学していた。百年来イギリス文明が築き上げてきた植民地都市香港が、太平洋戦争の勃発で滑稽なまでもろくも滅びて行くさまを、彼女はエッセー「燼余録」（1944年2月）で強烈な崩壊感覚と軽やかな解放感で描いている。「燼余録」は発表四ヵ月後の1944年6月には日本人翻訳家の室伏クララにより、上海の日本語新聞『大陸新報』に翻訳連載された。^{*12}

日本では戦後に『日本占領下の香港』（関礼雄著、林道生訳、小林英夫解題、東京・御茶の水書房、1995年）、『日本軍政下の香港』（小林英夫・柴田善雅著、東京・社会評論社、1996年）などの研究書は刊行されているが、太平洋戦争期の香港を描いた文学作品は、管見の限り戦時中も戦後も発表されていないようすである。

（四）最初の香港小説の翻訳と最初の香港をテーマとする日本語作品の出現（1945～1960年頃）

1945年8月に日本が降服すると、イギリスは主権を主張する国民党政権に先んじて香港を再占拠し、植民地支配を復活させた。その後香港は驚異的な復活を遂げ、日本占領下で60万に減少した人口は、47年には180万となっている。さらに国共内戦を経て49年に共産党が大陸を統一し支配権を確立すると、大量の難民が押し寄せ、二年余りで人口は50万以上も増加した。

この難民の中には、上海から移住してきた資本家、技術者、熟練工、そして文化人および黒社会の組織員が多数含まれるといわれる。こうして50年代には香港はこれまでの中継貿易港という顔に加え、工業都市・金融都市という相貌を備えるに至り、かつての上海の繁栄を継承したのであった。かつて横光利一（1898～1947）が長篇小説『上海』（1932年）を、阿部知二（1903～1973）が同じく長篇小説『北京』（1938年）を書いたように、香港に関する小説も刊行され始める。

最初の香港小説とは1953年2月発行の翻訳書『香港斜陽物語』全240頁で、原題は『某公館散記』（後に『人渣』に改題）、日本語訳刊行より二年前に香港求实出版社から刊行されたものである。著者の洛風は現在では阮朗（ルアン・ラン、げんろう、本名は嚴慶澍1919～81）のペンネームで知られている。^{*13} この小説は1951年の香港を舞台に、元国民党有力者のお屋敷の執事「わたくし」を語り手として、有力者すなわち「主席」とその第三夫人、長男、長女の一家が、大陸から香港へ持ち逃げしてきた資産やアメリカ提供の政治資金を悪用して、隠匿物資や株の投機、大陸への密輸などを企てるものの全て失敗し没落していくようすを、皮肉たっぷりに暴露するものであり、香港版人民文学とも言えよう。

本書の訳者は牧浩平で、彼はほかに魏魏『ルポルタージュ朝鮮戦線』（東京・ハト書房、1953）などの人民文学を翻訳している。版元のハト書房は、『毛沢東の文芸講話：一九四二年延安における』（毛沢東述、鹿地亘訳編、1951年）、丁玲『太陽は桑乾河を照

す』上・下巻（坂井徳三訳、1951年）、趙樹理『李家荘の変遷』（島田政雄、三好一共訳、1951年）など人民文学を専ら翻訳刊行していた出版社である。

日本人は敗戦後にアメリカ占領軍の統治を受けるいっぽう、社会主義中国への関心も高めた。しかし1950年の朝鮮戦争勃発後に、アメリカによる中国封じ込め政策が始まったため、中華人民共和国と国交を結んでいたイギリスが統治する香港は、日本にとっては数少ない中国との交流の窓口となっていた。このような中国・香港への関心の高まりを背景に、日本の人民共和国支持派の人々が旧国民党指導者一家の腐敗を暴く小説を翻訳刊行したのであろう。こうして『香港斜陽物語』が日本における最初の香港文学書となったのである。

なお香港では1997年に劉以鬯編『香港短篇小説選 五十年代』（香港・天地図書）と黄継持・盧wei〔王+韋〕鑾・鄭樹森編『香港小説選 1948-1969』（九龍・楽文書店）との二種の短篇集が刊行されているが、両書とも『香港斜陽物語』を「人渣」の原題で原作の数頁分を収録するのみである。

『香港斜陽物語』刊行から二年後の1955年には、最初の日本語小説『香港』が発表されている。著者の邱永漢（チウ・ヨンハン、きゅうえいかん、1924～2012）は台湾・台南の出身で少年時代から秀才の誉れ高く文学を愛好していたが、1943年に東京帝国大学経済学部に入學、終戦の年に同学部を卒業して、新台湾の建設を夢見て翌年2月に帰台したものの、二・二八事件（1947）後には台湾独立運動に協力し国連事務総長あてに台湾人自決の国民投票実施の請願書を起草、48年10月に香港へ亡命した。54年4月に再来日、短篇小説「密入国者の手記」を発表して日本文壇にデビュー、その後も続々と『濁水溪』*¹⁴などの傑作を書き続けた。その作品は日本人でもなく中国人でもありえない不条理な台湾人のアイデンティティを鋭く問うもので、1955年に小説『香港』で第34回直木賞を受賞、最初の外国人直木賞作家となった。

『濁水溪』は雑誌『大衆文芸』1954年8～10月号に連載された自伝的小説で、主人公は結末部で国民党の弾圧を逃れて香港へと逃亡を計画し、次のようにモノローグしている。

私が新しく購入した捷安丸は五十トンの百二十馬力。全速で走ると、十二ノットくらいは出る。その船に乗って、私は香港へ出る計画を立てている。もう私には国家もない。民族もない。私は永遠に地球をさまようユダヤ人になるのだ。*¹⁵

『香港』は『濁水溪』の後日談とも言える小説で、『大衆文芸』1955年8～11月号に連載された。*¹⁶ 同作の主人公頼春木は政治的な事情で台湾から香港に亡命し、貧民窟に住みながら、さまざまな事情で香港に逃げて来た台湾人たちに助けられたり騙されたりしながら、水運びの肉体労働から違法の露店商、伊勢海老漁などを経験したのち、台湾人の仲間がカサブランカへ粗悪品の茶を輸出するのを手伝い、その仲間が密貿易に手を広げるため日本に渡るのを見送るという物語である。上海から逃れてきて、家族を養うため娼婦

に転落したりりとの同棲も描かれている。阮朗の『香港斜陽物語』が国共内戦に破れて大陸から香港に逃亡してきた国民党指導者の贅沢と腐敗を暴いていたのに対し、邱永漢は『香港』において、さまざまな理由で台湾や上海から香港に渡った人々の低層生活と不正貿易などによる社会的成功などを描いたのである。日本は1952年の独立回復前後から経済復興を遂げてはいたが、『香港』発表時点では敗戦後の社会的混乱の記憶も生々しく、同作は幅広い読者層の共感を得て、直木賞受賞に至ったのであろう。なお『香港』発表の1955年にはハン・スーイン（韓素音）の小説『慕情』（Love is a Many-Splendoured Thing、1953）がヘンリー・キング監督により映画化され、日本でも劇場公開されて話題を呼び、日本人の香港イメージに少なからぬ影響を与えている。後述の森瑤子作品も70年代の高級バーで香港の男女に『慕情』ネタの洒落の応酬をさせている。但し小説『慕情』の日本語訳が刊行されるのは1970年のことであった。^{*17}

（五）日本の東アジア再進出と戦争の記憶（1960年頃～1970年頃）

やがて1960年代を迎えると、トランジスタ・ラジオなど日本製品がいっせいに東アジアに輸出され始め、日本人の国際線の航空利用客が1960年に10万人を突破している。戦後日本の東アジア再進出に際し、香港はその最大の窓口であり、この時期に二人の著名な作家が、香港を定期的に訪問する日本人商社マンを主人公とする短篇小説を書いている点は興味深い。

総合誌『文藝春秋』1958年5月号に掲載された堀田善衛「香港にて」の主人公築瀬は四八歳、弱小商社の社長として東南アジアから中近東にかけて弱電気を売っており、日本への帰路は香港に寄って一服し、彼が戦後初めて海外出張した際に機上で知り合った商売上手にして信頼できる洋服屋兼雑貨商の方文錦を訪ねていた。今回も方を訪ねて共に飲食し、馴染みのダンス・ホールに行き、今後の共同事業の話をする内に、築瀬自身の戦時中に特務機関員として中国とビルマで活動していた経験と、方が亡き妻と日本軍占領下で日本軍と国民党政府との間で二重スパイを働いていた記憶とが交差する……という物語である。^{*18}

著者の堀田善衛（1918～1998）は戦争末期に国際文化振興会の上海事務所赴任しており、敗戦後も1947年の日本引揚げまで国民党に徴用されるという戦時上海体験を持っている。この上海体験をエッセーにまとめ1958年に総合誌『世界』に連載した後、1959年に刊行したのが『上海にて』である。^{*19} 小説「香港にて」は、堀田が『上海にて』という戦争体験エッセーの執筆と平行して、戦後再びアジアに進出する日本人のあり方を問い直そうとしたものといえよう。

文芸誌『群像』1962年8月号に掲載された田村泰次郎「ある香港人」は、かつて「大陸の日本陸軍」の一員であった語り手「私」が、香港のやり手の洋服店経営者馬立齡の数奇な半生の体験を聞くという物語である。馬は馬賊の頭目だった父親の元を去り、満州国新京（現在の長春）の士官学校に入学、日本の敗戦後には日本兵と共にソ連軍に囚われて

シベリアで強制労働に従事するが、一年後に中共軍林彪部隊に編入されて旧日本軍武器の使用法を教えることになったものの、二年間の教習が終わり肅正されそうになったので脱走したところ、今度は国民党軍に捕まって将校に任じられ、大尉にまで昇進するが、再び脱走し上海に逃れて行商人となり、上海で旧国民党関係者への弾圧が厳しくなると、香港に逃れ、苦労の末、洋服屋を開業し、日本人客から鼻屑にされている……。馬立齡は日本の傀儡政権であった満州国から始めて、ソ連領シベリア、中国共産党軍、国民党軍と転々として、ついに大陸南端のイギリス領香港にまで流れてきて、再び日本人と関わりを持つのであった——60年代の日本人はもはや軍人ではなくビジネスマンや観光客であるが。^{*20}

著者の田村泰次郎（1911～1983）は1940年から敗戦までの五年間、日本軍兵士として山西省で過ごしており、戦後は「裸女のいる隊列」など日本軍の非道を描く小説を発表している。「ある香港人」掲載当時の読者の多くは、語り手を作者本人に重ねて同作を読んだことだろう。中国北方でそれぞれ日中戦争や国共内戦の体験を持つ日本人と中国人とが香港で出会うという構成は、香港に多くの日本人が訪れ始めた60年代には、日本人読者に侵略戦争の記憶を蘇らせ、再び中国と交流することの意味を深く問いかけたことであろう。

60年代には日本の映画会社東宝と香港の映画会社キャセイ（電懋）との合作映画『香港三部作』（千葉泰樹監督）が作成されている。第一作『香港の夜』（1961）では宝田明が扮する日本人特派員と尤敏が演じる香港女性との恋は成就せず、特派員はカンボジア内戦の取材に行き地雷を踏んで爆死する。第二作『香港の星』（1962）では、宝田は日本人商社マンを、尤敏は東京にある「日本女子医大」の留学生を演じており、二人は深く愛し合うもののきわどいところで離ればなれとなる。そして『ホノルル・東京・香港』（1963）では宝田は真珠会社社長の御曹司、尤敏はミス・ハワイに選ばれ、香港旅行に招待されて実の妹と親が決めた未知のフィアンセに再会するというハワイ華僑を演じている。このように香港三部作は最初は日本人男性の死による日港国際恋愛の破局を描き、次には日港男女を限りなく接近させるものの恋は成就させず、そして三作目でようやく日本人男性の求愛を中国人女性（ただしハワイ華僑）が受け入れるのである。

実は中国への侵略戦争が続いていた1939年から40年にかけて、東宝は長谷川一夫と満映の李香蘭のコンビで「大陸三部作」（『白蘭の歌』『支那の夜』『熱砂の誓い』）を製作して大ヒットを飛ばしていた。その『支那の夜』で日本人ヒーロー（長谷川一夫）が中国人娘（李香蘭）の頬を平手打ちする場面があり、中国人はこれに猛反発するという事件があったのだ。

『香港の星』で宝田が演じる主人公の名前は「長谷川」である。『ホノルル・東京・香港』では婚約前に自己主張の強い尤敏を宝田が思わず平手打ちしたのち、「これは日本人の愛情表現だ」と弁解したところ、婚約後に尤敏を飛行場まで送り別れのキスを、と言って頬を差し出す宝田に、尤敏が平手打ちを返して「これが日本人の愛情表現なんですよ」

と悪戯っぽく笑う場面がある。これはまさに長谷川一夫による李香蘭平手打ち事件に対する一種の賠償的演出であった。『香港三部作』は日本・東宝側にとっては過去に侵略戦争宣伝映画を作成したことに対する自己批判であり、香港・キャセイ側にとっては東宝の過ちに対する許しの儀式であったといえよう。^{*21}

60年代日本の文学と映画とは、国交のない中国を物語の舞台に選ぶことは難しかったものの、日本の東南アジア進出の足場であった香港を舞台として、侵略戦争に対する反省を表明していたといえよう。当時の日本文化界にとって、香港は帝国主義時代の過去を振り返り、民主化された平和憲法下での資本主義時代の未来を展望する場であったのである。

(六) 1970～1988年頃

70年代に入ると香港で育ち香港で高等教育を受け、自らを香港人と考える戦後世代が現れる。比較文学研究のかたわら創作活動を行っていた詩人也斯（イエスー、やし、本名梁秉鈞、1949～2013）は、その代表的作家の一人である。

也斯は1949年の生まれで原籍は広東省新会県、幼少より香港で育った。バプティスト学院（現在の香港バプティスト大学）英文系を卒業後、1970年から八年間ジャーナリズムで仕事をして、コラムや詩・小説を書いた。78年から84年までアメリカに留学、カリフォルニア大学サンディエゴ校で比較文学を学んで博士号を取得し、香港大学比較文学系の高級講師を経て嶺南学院大学教授となった。

『記憶の都市・虚構の都市』（1993）は也斯が一〇年の歳月をかけて執筆した自伝的小説だ。留学生の「私」が、ニューヨークやサンフランシスコ、そしてパリ、台北で出会う人々、特に香港の詩人や演劇青年たちとの対話を通じて現代欧米文化と香港知識人との関わりを描き出している。アシュベリーやF・オハラらのニューヨーク派の詩人に傾倒し、アメリカのアンガラ文学を翻訳するいっぽう、ブレヒトの戯曲を広東語で上演した70年代世代の「私」は、文化的活気と安定とに恵まれた欧米諸都市で考える——文学・芸術とは重い記憶ではないのか、それは忘却してはならぬと人呼び覚ますのだ。複雑錯綜とした都市生活者の私たちに、物事がなぜこうであるのかと考える手がかりを与えてくれるのだ。それならば辺境の都市、文化砂漠の香港、飛行機を待つ都市にあって文芸とはいったい何であるのか、と「私」は問い続けているのである。あとがきで也斯はこう述べている。

香港で成長した世代が、異文化との接触を通じていかに自己成長の過程を反芻するか、外で何を学び取り、帰港後いかに急激な現実の変化に対応するのか、私はそんなことを書いてみたかったのだ。

このような香港アイデンティティの探究の背景には、文化大革命（1966-76）勃発によ

る大陸との政治的断絶と、84年には国民一人当たりのGNPが6300米ドルに達するという香港の経済的躍進とが存在している。ちなみに同年の日本が8195ドル、イギリスが8530ドル、中国が310ドルであった。この84年という年には中英両国間の外交交渉において一三年後の香港の中国への返還が合意されて、この97年問題が香港人に深刻な政治不安をもたらす。そのいっぽうで香港文化創造の意欲が高まり、90年代に入ると、いわゆる「純文学」では也斯や董啓章（トン・タイチョン、北京語トン・チーチャン、とうけいしょう、一九六七～）らが、いわゆる「通俗文学」では李碧華（レイ・ピッワー、北京語リー・ピーホワ、りへきか、生年不詳）が国際的にも注目を集め始めた。この時期には70年代から世界的に大流行していたカンフー映画と、70年代末に始まる香港ニューウェーブも共に洗練の度合いを増していく。後者の代表的な監督には徐克（ツイ・ハーク、標準語音ではシュイ・コー、じょこく、1951～）、許鞍華（シュイ・アンホワ、きょあんか、アン・ホイ、1947～）、譚家明（パトリック・タム、1948～）、嚴浩（イエン・ハオ、広東語でイム・ホー、1952～）らがいる。^{*22}

経済成長と政治不安とが相剋する中で香港アイデンティティが成長していく都市、政治経済のみならず、文化においても世界都市となりつつあった香港に、日本人作家で正面から向き合おうとしたのが、森瑤子（本名は伊藤雅代、1940～1993）であった。森は静岡県伊東市に生まれたのち、一歳から四歳まで父の仕事の関係で中国・張家口に暮らし、敗戦直前1945年3月に日本に戻った。六歳でヴァイオリンを学び、1959年に東京藝術大学器楽科に入学するが、フランソワーズ・サガン、ジャン＝ポール・サルトル、アルベール・カミュなどフランス文学に傾倒して、ヴァイオリンへの興味を失い、1963年東京藝大卒業後は広告代理店に勤め、翌年イギリス人アイヴァン・ブラッキンと結婚、三人の娘を産み専業主婦として暮らした後、1978年小説『情事』で集英社文芸誌『すばる』の第2回すばる文学賞受賞して作家デビュー、93年に胃癌のため永眠^{*23}するまで、華麗な文体により万華鏡のような恋愛小説を多数書き続けた。現代日本の張愛玲と称することも可能であろう。

森瑤子が香港の母娘二代（回想の中に登場する上海で水死する祖母を入れると女性三代）をめぐる連作短篇小説の第一話「浅水湾〔リパルスベイ〕の月」をいわゆる「大衆文学」雑誌『小説現代』に発表したのは1986年10月のことである。1977年2月、香港島南部の高級クラブ「ベイ・カントリー・クラブ」では、二三歳の欧亜混血児ロレッタ〔Loretta〕・崔〔サイ〕が三〇代後半のイギリス人の愛人G. B. ムーア〔Moore〕から別れを告げられようとしている。ロレッタは出生直後に母親から新界（ニューテリトリー）・元朗の底層社会に住む叔母に預けられて育ったが、好色で賭博好きの叔父により十年前に彼女の美貌に魅了されたムーアに売り飛ばされ、一四歳でムーアにレイプされセクハラを受け、彼の愛人となったのだった。舞台の高級クラブには日本人の通信社特派員もおり、彼はロレッタが旧知のベトナムとフランスの混血娘に似ていると言って近付いてくるが、ロレッタは祖母は上海で日本兵にレイプされて自分の母が生まれたと告げ、彼を突き放

す。そしてクラブから離れる間に、彼女にミンクの半コートを着せようとするムーアを刺す——「媽〔母さん〕を犯したでしょう？」とささやき、「憎しみも愛に似ているのかもしれない」*²⁴ と思いながら。そんな彼女をリムジンに乗せたのが、伝説の叩き上げの富豪でクラブの経営者でもある老人張家輝だった。

『小説現代』に翌月号に発表された第二話「ザ・ロビー」の時代は第一話よりも二五年溯った1952年、舞台は高級ホテル、ペニンシュラのロビーである。モニク・李^{レイ}は二年前から毎日4時から5時45分の間、ロビーに現れ、常連客らに女王のように微笑を投げかけ、時には優雅でやさしい話し相手となっていた。とりわけモニクを寵愛したのが白系ロシアの女性富豪で、モニクを遺産相続人にしたいとまで言うようになっていた。そのいっぽうでモニクはイギリス人特派員のボブ・ホーガンに好意を寄せるが、勇気を奮ってボブのアパートを訪ねると粗暴なセックスを強要され、彼女が午前と夜間、尖沙咀で香港人相手に売春をしていると糾弾されてしまう。モニクの母は上海で日本兵にレイプされて彼女を産み、モニク自身は一七歳で父親の違う妹と海を泳いで新界に辿りついたのだった。初冬に女性富豪が亡くなると、モニクに残されたのは入院費の請求書だけ、ホーガンの子供を妊娠していたモニクはペニンシュラから姿を消してしまう。それから一七年後、再びホテルのロビーに姿を現したモニクは、中国人老富豪の張家輝と腕を組んでいる。そして彼女が旧知の作家や株屋と旧交を温め合う間に、イギリス人に連れられてロビーに入ってきた美しい娘がロレッタ・崔であった。

最終話『『1997』』は、1981年のハッピーバリーのバー『1997』が舞台である。偶然にロレッタと再会した日本人特派員の山崎は、彼女に三年前の事件でムーアは軽傷ではなく不審死で発見されたことを告げ、再びパリで殺されたベトナムとフランスの混血娘の思い出話を語る。そこにボブ・ホーガンが現れ、ロレッタの現在の職業を暴き、ロレッタも彼と自分の母との関係を切り出して去って行く。雨の中、彼女を追う山崎だったが……

三話の連作小説は1987年10月に単行本『浅水湾〔リパルスベイ〕の月』として刊行された。血統をめぐる因果関係は、韓流ドラマの先駆けのような印象を与えるが、1950年代から80年代まで、中国人富豪や欧米支配階級から底層社会までの香港を、偏執狂の日本人特派員を脇役に配しながら、優雅な舞台において華麗にしてシニカルな文体で描いた点は注目に値する。日本文壇において森瑤子は初めて香港を歴史的に総体的に捉えようと試みた作家なのである。

『浅水湾の月』は変態的な恋愛を描くいっぽうで、レイプや殺人も頻発させているが、実は、1980年以後、日本の多くのミステリー小説が香港を舞台として、「香港ヒルトン殺人事件」（伴野朗著、1980年『推理小説代表作選集』収録）、『香港殺人旅行』（斎藤栄著、1981）、『香港・マカオ休日殺人事件』（斎藤栄著、1986）、『香港グルメ殺人ツアー』（さわだ須美著、1991）等々の殺人事件を描いていたのだ。その背景の一つとして、日本人の香港旅行ブームを指摘できよう。森瑤子が『浅水湾の月』で観光名所やホテルを舞台に選んだのも、この旅行ブームとは無縁ではなく、そして日本におけるミステリーと旅行とい

う二つの香港ブームを結合して、青春期日本人の不安を香港アイデンティティの動揺に重ねてみせたのが、二一世紀初頭に発表される中島京子の連作小説『ツアー 1989』であった。但しモニク・李〔レイ〕が二〇歳の娼婦でありながらもボブ・ホーガンとの恋愛を夢見たものの、その一七年後には老富豪の愛人となっていたような森瑤子の時代とは異なり、21世紀ともなれば青春あるいは人生モラトリアムは三〇代後半にまで延伸されているのだが。

(七) 1989～2006年頃——中島京子『ツアー 1989』

中島京子は1964年東京都生まれ、東京女子大学文理学部史学科在学中に中国語を学び、出版社に勤務して中国語教科書等の編集を行ったのちフリーライターになり、2003年『FUTON』で小説家としてデビュー、2012年に香港作家董啓章の短篇集『地図集』を筆者と共訳で河出書房新社より刊行、2010年長篇小説『小さいうち』で直木賞を受賞、同作は2014年に山田洋次監督により映画化され、出演した黒木華が第六回ベルリン国際映画祭最優秀女優賞（銀熊賞）を受賞している。

『ツアー 1989』は中島京子の最初期の小説で、集英社の文芸誌『すばる』の2005年1月、6月、9月そして2006年2月の各号に連載された「迷子付きツアー」「デディ・リーを探して」「リフレッシュ休暇」「吉田超人」の四篇を収録しており、2006年5月に集英社より刊行された。四篇は日本人による1989年のある香港「迷子つきツアー」を2004年の時点から回想するという点では共通している。『ツアー 1989』については、文芸評論家の斎藤美奈子による短いながら優れた新聞書評があるので、あらすじの紹介を兼ねてその一部を引用したい。

まず、ある主婦のもとに15年前の手紙が届く。書かれたのは1989年。差出人は香港にいるらしい。「凧子さん」と自分に呼びかけている。しかし、彼女にはそんな男と会った記憶もないのである。

2番目の男性は、15年前の自分の日記を見つけて読みふけてしまう。香港旅行中に会った女や消えた男のことが書かれていた。だが、すべては夢の中の出来事のように。

3人目の女性は、ネット上で奇妙なブログを発見する。そこには彼女しか知らないはずの15年前の出来事が綴（つづ）られていた。1989年の日付。その頃彼女は旅行会社の添乗員をしていたが……。

と、このように、物語は同じ日付（1989年3月）の同じ場所（香港）をめぐる記憶の問題として提出される。

3人の背景にあるのは「迷子つきツアー」と呼ばれる奇妙な団体ツアーだった。1989年から92年にかけて実施されたそれは〈通常のパッケージツアー客の一人を、『迷子』として現地に置き去りにすることにより、他のツアー客に『不思議さ』や『奇妙な感覚』

を体験させること〉を目的としていたのである。

15年といえば、殺人事件の時効が成立するだけの年月である。小説は一見「迷子つきツアー」の謎解きのような装いを凝らしているけれど、ミステリーのように読んではいけない。最終章「吉田超人」にたどり着く頃には、読者自身も「不思議さ」「奇妙な感覚」に巻き込まれていることに気づくだろう。^{*25}

斎藤美奈子は書評冒頭で「手の込んだ長編小説だ」と述べているが、細かいことを言えば、連作短篇と称するべきであろう。なぜなら単行本化の際には、四作各篇には「エピソード1」以下の番号が振られ、文芸誌発表順では二番目の「テディ・リーを探して」には「エピソード3」が、三番目の「リフレッシュ休暇」には「エピソード2」がそれぞれ割当てられており、さらに「エピソード1～3」は「I」部に、「エピソード4」の「吉田超人」は「II」部に分類されているからである。このような四作品に対する「細かい手の込んだ」編集ぶりから判断して、『ツアー1989』には連作短篇への分類が相応しいであろう。

斎藤美奈子は書評の結びに「昭和から平成に変わったあの年の3月。私は何をしていたんだっけ。」と自問して、暗に『ツアー1989』が読者に1989年の記憶の再構成を促す小説であることを示唆している。実際に第一章「迷子付きツアー」の主人公は、結婚して専業主婦となる前には窓口担当の銀行員で、良く考えれば夫と結婚して三年目の1993年に香港旅行に出かけたことはあったな、と思い出す程度の関わりしか香港とは持っていない。そんな彼女がある日自宅を訪ねてきたアルバイトのセールスマンで本業は駆け出しのノンフィクション・ライターの若い男性から、15年前に香港で失踪した青年からの失踪当時のラブレターを渡される。ライターは「一九八九年に企画された、ある奇妙な香港ツアーのことを調べて」^{*26}おり、二年前に訪港した際にこの手紙を預かったのだという。だが主婦には銀行に彼女に時々会いに来ていたという失踪青年に関する記憶は蘇らず、むしろその後結婚した夫がその青年を覚えているのであった、夫婦の香港旅行中に妻の名を呼んだ男がいたことも含めて……

主人公の名は「凧子(Nagiko、凧は風が止み波がおだやかになること)」という国字、すなわちメイド・イン・ジャパンの漢字であるためであろうか、80年代の元銀行員らしく恒心、平常心に富み、香港からの手紙に書かれている「夜毎に処女喪失を演じてみせる年齢不詳の女のように、僕を怯えさせ不安がらせる、悪夢の街です」^{*27}という言葉に共感する心性は持ち合わせてはいない。もっとも結婚後の現在は三浦という「凧子」と「バランスがいい」^{*28}姓に変わっているものの、結婚前の旧姓「林(Hayashi)」は、「林(Rin)」と音読すれば中国人の姓ともなりうるし、風が吹けば松籟も生じるのであろう。彼女は二年前の夫の浮気騒動で「何かが昔と変わってしまっ」^{*29}ていたと自覚していたからこそ、手紙を「気味が悪くても捨てられない」のだ。

一五年前に香港で消えた青年の記憶は、21世紀に入って中年の入り口に差し掛かり「何

かが昔と変わってしまった」と自覚する青春晩期の人々の心を揺さぶる。「第二章「リフレッシュ休暇」の主人公の男性は、失業したため自宅マンションを売却し、小学六年生の娘を連れて妻の実家に同居するための引っ越し準備を始めたところ、15年前に会社の福利厚生事業として勤続七年目の社員に与えられる「リフレッシュ休暇」制度で香港旅行に出かけた時の日記を見つけて読みふける。そして当時、同じ旅行団にいた学生が消えてしまったのに、自分は一種の美人局に気を取奪われて添乗員に通報することもなく帰国便に搭乗したことを思い出し、今や自宅マンションも猛烈会社員の職も失った自分を、消えた若者に投影したのであるだろうか、茫然自失となる。彼は自らの現在の苦境——夫として、父として、社会人としてのアイデンティティ危機を迎えて、初めて香港の街中に消えた若者に共感を抱いたのであるだろうか。

第三章「テディ・リーを探して」の主人公の女性は一五年前に旅行社で香港ツアーの添乗員として働いていた時に、カメラマンの「テディ・リー」こと「リー・ジェアン」という香港不法滞在の北京人の恋人がいた。しかし「テディはいつのまにか消えてしまい」*³⁰、彼女も寿退社で旅行社を辞めるのだが、婚約は解消されて、「それからというもの、家で子供向けの英語教材を作る仕事をしている。あれから何人か恋人を変えたけれど、どの人とも結婚にはいたっていない。」*³¹ 物語の現在、彼女が自分とテディ・リーとの情事など「わたししか知らないはずの、遠い昔のできごとを仔細につづった」*³² 日記とエッセー「テディ・リーを探して」をネットで見つけてこれを読むと、その語り手も添乗員で、テディ・リーの他国に駆け落ちしようという甘言に乗せられ、彼が日本人旅行者のパスポートを騙し取る手伝いをさせられたという。主人公の女性は不気味そして不審に思いつつ、テディ・リーが自分以外にも日本人添乗員を恋人にしており、その内の一人がこの手記を書いたのかと考えて、自分の一五年前の記憶を思い出しながら、日記・エッセーを「さようなら、テディ・リー」という題名で書き直し、「盗まれて捏造された記憶を取り戻す」*³³。日記・エッセーの語り手が、リーに騙され捨てられたことの衝撃ばかり書いて、香港に置き去りにされた「ぼんやりした若い男の子」*³⁴ ことを忘れてしまっているので、主人公は自身も彼も共に飛行機に搭乗させて、日本に送り返すのだ。しかし香港物推理小説好きの読者であれば、第一章でカメラマンは「台湾ノ特務」*³⁵ つまりスパイと関係があったというリーの仲間の証言を手掛かりに、リーは政治的亡命の替わりに日本に密入国した、と謎解きすることだろう。もっとも主人公の現在の恋人が「あんたには消したい記憶があったの?」「あんたの言ってることはものすごく変だ」*³⁶ と言うように、確かに少し変である。そもそもテディ・リーは「日本語は東京で生まれたといってもおかしくないほどきれいな」*³⁷ であり、リーの仲間も「アノ人、ヤップンツァイ〔日本人—藤井注〕ヨ」と言っている。『ツアー 1989』、特にその第三章は主人公と共に物語の記憶を書き直しているうちに、読者もまた「困ったこと」になって「頭を抱えて」しまう物語である。

第四章「吉田超人」にはいよいよ一五年前に香港で消えた若者「木下」本人が登場す

る。一五年前に一九歳だった彼は、片思いの相手の風子は結婚し、父は亡くなり、まさに茫然自失とした姿で「死んだ父親が行くはずだった三泊四日の香港ツアーに、代わりに出かけて行」*³⁸き、その不安な心理につけ込んだデディ・リーと彼の恋人添乗員に迷子に仕立てあげられ、パスポートも盗まれてしまうのだが、その後は「一九八九年に「迷子」の一人として、墮落した日本に愛想をつかして国を出た憂国の士。／香港に住みついた彼は、返還を目前に控えたあの街で、反中国政府ゲリラのリーダーになり、「吉田超人」と呼ばれるようになった……」*³⁹という伝説的人物に変身していた。今ではバンコックにいる彼が、駆け出しのノンフィクション・ライターに語る真相とは……。ちなみに「吉田超人」とは、円谷プロ製作のテレビ番組ウルトラマンに対する香港での広東語の呼び名である。

『ツアー 1989』とは日本 80 年代のバブル経済に浮かれ、香港旅行に繰り出していた若者が、青春の終わりを迎える頃にアイデンティティの揺らぎを覚え、青春の初期段階ですでにアイデンティティ危機を迎え香港で自分探しを行った伝説的人物に共感を抱く、という物語のようである。

ところで 1989 年 4 月に北京で民主化運動が始まると、香港人は近い将来に新たな支配者となる中国の自己変革を期待し、この運動をわが事のように全面的に支援した。しかし北京の民主化運動は 6 月 4 日には武力鎮圧されてしまう。天安門事件（あるいは「血の日曜日」事件）の勃発である。香港の批評家岑朗天〔シュム・ロンティン〕は、事件後の香港人の心境をめぐる、普遍的価値感の喪失、記憶の喪失に対する無力感であった、と指摘している。*⁴⁰ 1989 年の香港で起きた日本の若者消失事件の記憶をめぐる『ツアー 1989』とは、天安門事件後に普遍的価値感と記憶喪失の感覚を抱いていた香港人に対する深い共感に基づく小説であるともいえよう。平和と繁栄に酔い痴れていた 80 年代が終わった後には、「失われた二〇年」という長い低成長時代を過ごしている日本人と、80 年代以来、繁栄と不安の板挟みになってきた香港人とが、中島文学において対話しているのである。

日本の文学者は幕末明治期以来、自らが直面する近代化、グローバリゼーションの課題に対する解答を求めて、香港を見詰めてきた。福沢諭吉の「脱亜入欧」、宮崎滔天の中国人への「熱愛」、漱石の夜景讚美と義和団事件に対する憂慮、パリを目指した金子光晴の香港貧乏暮らし、堀田善衛・田村泰次郎の戦後日本の対アジア関係—それぞれの時代の課題に、香港はさまざまな解答を示してきた。やがて 80 年代に香港文化、香港アイデンティティが鮮明になると、森瑤子はイギリス、日本、そして中国の男性の凌辱を受けながらも、自立を求める香港の混血の母と娘とを描くに至る。このような森瑤子の香港人への深い共感を継承するかのように、中島京子は天安門事件後の香港人の不安と恐怖とを、バブル経済崩壊前後の日本人の問題と交差させながら、巧みに描いたのである。

2014 年 11 月香港雨傘運動の最中、村上春樹はベルリンで行ったスピーチで、今の世界には「民族、宗教、不寛容といった壁」があると指摘し「壁と闘っている香港の若者た

ちにこのメッセージを送りたい」と語った。これに続けて、彼は翌年3月にも再び香港の若者に向かい「これからもがんばって、ほんの少しずつでもいいから世界を変えていってください。僕も応援しています」*⁴¹ とエールを送っている。それは、1996年に短篇小説「レキシントンの幽霊」を執筆し、初期の“デタッチメント”時代の終わりを語って以来*⁴²、彼の文学に一貫する“コミットメント”なのである。その村上春樹が“コミットメント”発言の対象として現在の香港を選ぶ背景には、150年の日本文学における香港像形成の歴史があったことを忘れてはなるまい。

ところで本稿改稿中の2019年11月9日、『朝日新聞』デジタル版は「香港デモ参加か、学生死亡 衝突付近で負傷 情勢さらに緊迫」という見出しの記事冒頭で、以下のよう

に報じた。

反政府デモが続く香港で、デモ隊と警察隊の衝突現場付近で負傷し、意識不明の重体となっていた男子大学生の周梓楽さん（22）が8日、死亡した。自殺者を除けば、一連の抗議活動に関連して犠牲者が出るのは初めてとみられる。夜には反発した若者の集団に警察が威嚇射撃で応じたとの情報もあり、情勢がさらに緊迫している。

村上春樹は2009年2月にイスラエルの文学賞「エルサレム賞」の受賞講演で「高くて固い壁と、それにぶつかって壊れる卵」という比喩を用いて、パレスチナ・ガザ地区を侵攻するイスラエル軍を壁に、イスラエルに抗議するパレスチナ人を卵に譬えた。村上の言葉を借りれば、香港では警察隊という「壁」に「デモ隊」という卵がぶつかり壊れるという事態が生じているもようである。平和的解決を切に望みたい。

*本稿は2015年4月10-11日に香港教育学院と香港樹仁大學共催で両校で開催された「香港史」国際學術研討會：從文化及文學的角度詮釋香港歷史 (International Conference on The History of Hong Kong: Interpreting History through Culture and Literature) における基調講演「香港與這一百多年來的日本文化界」を加筆修整したものである。

注

- *1* 董啓章『地図集』藤井省三・中島京子共訳、河出書房新社 2012 年 2 月、131 頁。
- *2* 浜下武志『香港——アジアのネットワーク都市』東京：筑摩書房、1996 年 9 月、33 頁。
- *3* 『福沢論吉全集』第八巻、岩波書店、1960 年 2 月初版、1970 年 5 月再版、66～67 頁。陳湛頤『日本人與香港——十九世紀見聞録』香港・香港教育図書公司、1995 年、128～129 頁。
- *4* 陳湛頤『日本人與香港——十九世紀見聞録』129 頁。
- *5* 宮崎滔天『宮崎滔天全集第一巻』「三十三年の夢」平凡社、1976 年、72～73 頁。
- *6* 陳湛頤は『香港日本關係年表』（陳湛頤、楊詠賢編著、香港：香港教育圖書公司、2004 年）では 55 頁で「文学家夏目漱石赴英留学途中經港。」と言及している。
- *7* 『定本漱石全集 第十九巻』2018 年 4 月、65 頁。この日記の一節を江藤淳は『漱石とその時代』第二部 121 頁で引用しているが、「ここにあらわれている時間に対する無力感是一種の死の感覚である。」と解釈し、漱石の同時代中国への関心には何の関心も示していない。
- *8* 『定本漱石全集 第十二巻』岩波書店、2017 年 9 月、8、31 頁。
- *9* 金子光晴『詩人金子光晴自伝』平凡社、1957 年 8 月初版、1971 年 9 月 AJBC 版第 2 刷、160～161 頁。
- *10* 金子光晴『どくろ杯』東京・中央公論社、中公文庫、1976 年、228～229 頁。
- *11* 金子光晴『どくろ杯』229 頁。
- *12* 張愛玲『燼余録』は現在「戦場の香港——燼余録」の訳題で張愛玲著『傾城の恋／封鎖』（藤井省三訳、光文社古典新訳文庫、2018）に収録されている。
- *13* 劉以鬯主編『香港文学作家伝略』香港・市政局公共図書館出版、1996 年、43～44 頁。「百度百科」によれば、「その息子は香港で著名な監督嚴浩で、嚴浩は 1984 年の映画『似水流年』のエンディングで嚴慶澍に対し深い思いを表明しているという。http://baike.baidu.com/link?url=E9zdMDsCNhPyI0BqooMUFbdTT5C099uqCfo41ukTCvm2uW9O2pvOdPNdmRQ4t8pTVaxoIkkE0VoF-y9u_7J8iK（2015-3-19 検索）
- *14* 邱永漢『瀟水溪』は雑誌『大衆文芸』1954 年 8～10 月号に連載された後、同年現代社より刊行された。
- *15* 邱永漢『邱永漢 短篇小説傑作選 見えない国境線』新潮社、1994 年 1 月、213 頁。
- *16* 邱永漢『香港』は『大衆文芸』1955 年 8～11 月号連載後、翌年近代生活社刊行の短篇集『香港』に「石」「華僑」と共に収録された。
- *17* 森瑤子『浅水湾の月』講談社文庫、1990 年、140 頁。ハン・スーイン（韓素音）『慕情』深町真理子訳、角川文庫、東京・角川書店、1970 年。
- *18* 堀田善衛「香港にて」は堀田の短篇集『香港にて』（東京・新潮社、1960 年）に収録された。
- *19* 堀田善衛『上海にて』筑摩書房、1959 年。
- *20* 田村泰次郎「ある香港人」は田村の短篇集『失われた男』（講談社 1967）に収録された。
- *21* 詳しくは参照拙著『中国映画 百年を描く、百年を読む』岩波書店、2002 年、158～160 頁（葉雨訳『隔空観影』北京・世界图书出版公司、2014 年、158～160）。
- *22* 1960～90 年代の香港文化状況に関しては参照拙著『現代中国文化探検』岩波新書 1999 年「第 3 章香港」。
- *23* 森瑤子の伝記に関しては、<http://www.sakkatsu.com/author/detail.php/11575/> を参照した（2015-3-20 検索）。
- *24* 森瑤子『浅水湾の月』講談社文庫、1990 年、54 頁。
- *25* 斎藤美奈子「「不思議さ」漂わせる手の込んだ物語」『朝日新聞』2006 年 7 月 16 日。
- *26* 中島京子『ツアー 1989』集英社文庫、2009 年、20 頁。
- *27* 中島京子『ツアー 1989』12 頁。
- *28* 中島京子『ツアー 1989』13 頁。
- *29* 中島京子『ツアー 1989』15 頁。

- *30* 中島京子 『ツアー 1989』 107 頁。
- *31* 中島京子 『ツアー 1989』 114 頁。
- *32* 中島京子 『ツアー 1989』 90 頁。
- *33* 中島京子 『ツアー 1989』 119 頁。
- *34* 中島京子 『ツアー 1989』 101 頁。
- *35* 中島京子 『ツアー 1989』 32 頁。
- *36* 中島京子 『ツアー 1989』 119 頁。
- *37* 中島京子 『ツアー 1989』 89 頁。
- *38* 中島京子 『ツアー 1989』 131 頁。
- *39* 中島京子 『ツアー 1989』 198 頁。
- *40* 天安門事件に対する香港人の反応に関しては参照拙著『村上春樹のなかの中国』（朝日新聞社、2007）「第3章香港のなかの村上春樹」。
- *41* 香港共同「村上春樹さん、香港若者を激励「無駄には終わらない」」更新日時：2015年3月3日（火）AM 12:41、http://www.jomo-news.co.jp/ns/2015030201002286/news_zenkoku.html（2015-3-4 検索）
- *42* 村上春樹の「レキシントンの幽霊」に関しては参照拙稿「「レキシントンの幽霊」におけるアジア戦争の記憶——村上春樹“デタッチメント”時代の終わりをめぐって」（田中実、須貝千里編『文学が教育にできること読むことの秘鑰』教育出版、2012年、収録）。

香港與這一百多年來的日本文化界

藤井省三

自幕末明治时期以降，日本的文学者带着对解答自身所面对的世界近代化、全球化问题的渴求，一直凝视着香港。福泽谕吉的“脱亚入欧”，宫崎滔天对中国人的“热爱”，夏目漱石对夜景的赞美以及对义和团事件的忧虑，梦想着巴黎的金子光晴的香港贫困生活，堀田善卫、田村泰次郎的战后日本与亚洲关系……面对不同的时代课题，香港给予了各式各样的解答。及至 80 年代，香港文化、香港意识逐渐鲜明，森瑶子描述了受尽英国、日本、中国男性凌辱，依然追求自立的香港混血母女。仿佛是继承森瑶子对香港人的深切共情，中岛京子将泡沫经济破裂后日本人的问题穿插入文，巧妙地描绘了天安门事件后香港人的不安与恐惧。